

『グローバル天理』第2号（通巻26号）掲載論文要旨

井上昭夫 「巻頭言 牛疫に見る不条理とひながたの道」

日本では狂牛病の影響で、廃用牛が増えた。もしその膨大な飼料代をアフガン難民の食費にあてれば、1年分に相当するという不条理がある。この狂牛病の影響で食品会社の偽装事件も明るみに出たが、その原因は「高山」である「経営者」にある。最近の外務大臣更迭劇は高山である外務官僚のNGOに対する理解の未成熟を露見した。苦しむ「谷底」へのまなざしから始まった教祖の施しのひながたを思い起こそう。

荒川善廣 「「元の理」の探究（11）—人間と存在〔2〕」

有機体の哲学（the philosophy of organism）では、生きていようがいまいが、存続物（enduring objects）とはすべて経験の諸契機（occasions）の社会（societies）を意味する。人間や高次の形態をもつ動物は、支配的な人格的社会（personal societies）を含んだ社会体系をなしている。宇宙にさまざまな段階の社会が存在するようになったのは、神が時間的世界の中でより高い価値の実現を欲しているからである。「元の理」に示された人間の出直しと成人の物語は、人間が草木・虫魚のような低次の経験段階から徐々に成長して禽獣の段階を経て、ついには親神の望まれる人間としての経験ができるようになるまでの道程を、象徴的に描いているのである。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（5）—宗教とスポーツ〔4〕」

宗教とスポーツにはともに精神性が意味をもつものとして一つの接点を見出すことができる。その精神性は練習や稽古の繰り返しの中で作り上げられていくが、師と弟子が針と糸との関係にたとえられるように、つかず離れず、一体となり、師の歩んだ道を寸分狂わぬように歩むことによって、師の到達点に達しうると教えられている。これは、師の学んだ型をそのまま弟子も師にならって学びとっていくことを意味し、その型の模倣を通して独創性が発揮され、新しい型を生み出していくと考えられる。

末延岑生 「ことばと教育（11）—ことばの元を探る〔11〕」

地球が多くの生物からでき上がっていて、それらがお互いにコミュニケーションをしているのと同じように、人間も米粒のような細胞からでき上がっていて、それらが体の中でコミュニケーションをしている。『おさしづ』に「精神ひとつの理によって、一人万人に向かふ」とあるように、受精卵は一つの元の細胞であり、それが万人どころか 60 兆もの仲間の細胞をつくりだす。コミュニケーションとは、触れ合うこと、助け合うことを意味すると定義すれば、細胞の動作、働き、細胞間のインター・アクションも、コミュニケーションの一つと考えることができる。そのメカニズムこそ、理想の陽気ぐらしの世界の原点であるとともに、そこには同時にコミュニケーションの原点が潜んでいるのではないだろうか。事実、神経系と内分泌系の各細胞は互いにそれぞれの特徴を生かして分業しており、我々の生命は、各々の細胞と体内のさまざまな器官の働きのお陰で維持されていることがわかる。それらの細胞の命をつなぐものは、細胞間のコミュニケーションそのものの作用である。となれば、「万人を動かすほどの理」の元なる力というのは、実はこのコミュニケーションの力に他ならないのではないだろうか。

佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌（13）戦前のフィリピン伝道（11）戦前のフィリピン伝道のまとめ」

明治以来、多くの日本人がフィリピンに渡った。その中には、天理教の信仰をもって いるものも少なからずいた。数こそ少ないが伝道を目的に渡った人も いる。教えを聞き、たすけに浴した人びとも現れ、教会の設立にいたったことは、これまで 述べたところである。第二次世界大戦は、真実重ねられた成果を、無に帰す結果をもたらした。しかし、戦後、現地へ思いを遺した人びとによって、新たな伝道 がなされるようになった。

堀内みどり 「天理異文化伝道（24）天理教のコンゴ伝道 [23] — 2 代会長時代（1967—1971） [4] 」

たとえ日本人がいなくても、コンゴのどこかで信仰が続いてほしい、コンゴの荒野で 過酷な自然環境で暮らし、病気で苦しんでいる人々を救いたいという清水会長の決心はブラザビル以外の土地に布教の拠点を設定するという活動となった。まず、長年の信者であるムアング・マチウの出身地ルカク村を拠点とし、

そこに工藤誠悦が派遣された。厳しい生活環境の中、工藤は、おさづけの取り次ぎに励んだ。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（26）—健やかさということ」

民俗舞踊を踊ることを通して踊り手が変わってゆく変容の過程は、広く癒しとして捉えられる変容の過程と重なりあう。といってもそれは、数値化に行き着くような、客観的「正常」のモデルに辿り着くわけではない。

現実の場面で実現される自然さは、それぞれの個的な条件に即して生まれてくる。むしろ、同じような原理に沿って自然であればあるほど、個々に具わったそれぞれの条件に応じて、それぞれ違った表現が生み出されてくるだろう。

癒しのプロセスは、決して一元的に同じ方向を目指しているわけではない。健やかさの中身は、さまざまな人間観に即して思い描かれ形づくられる具体的人間関係の中で実質を与えられてきた。いわばそれは、誰かと誰かとの特定の関係にふさわしいからだや心のありようといってもよい。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（26）修行論〔2〕」

前回の自力修行論に次いで、今回は他力修行論について語ってみた。主としての浄土系の修行論（内観）と天理教（教祖）の在り方について。次回は、今一度新たな修行論について語ってみることにする。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（24） 生殖技術とジェンダー〔2〕

20世紀初頭のドイツにおける急進派フェミニズムは、1960年代の第二波フェミニズム（second wave feminism）のレベルにまですでに達していた。しかしそのラディカルな「自己決定権」の思想も、当時の優生学という力に包摂されていたのである。

上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信（20） 東アジアの庭園」

東アジアのスケール感と自然美は独自の庭園文化をつくったが、その特質は、ポエティック（詩的）、エステティック（審美的）、サステイナブル（再生の）という3つの範疇で定義される。中国、韓国、日本では、古代において詩的庭

園としての風格ができあがっていた。この詩的庭園の持つ象徴的・抽象的特性は、世界の新しいデザインにも大きな影響をあたえるであろう。